



鍼灸治療のスタイル① お腹の治療

鍼灸の世界では、各人各様の治療スタイルがある。それは、鍼灸家の一人ひとりが、本で読んだり、師匠から教わったり、さまざまな鍼灸の講習会などで見聞きした治療のやり方から、自分に合っていると思っただけのものを参考にして、自分自身の治療のなかで創り上げてきたものである。

無論、私自身も自分の治療スタイルをもっている。『中医臨床』という公的な誌面をいささか私的に用いているくらいがあるが、ここで少し、その治療スタイルのなかで、中医派では一般的にはあまり行われていないであろう、ある意味で特異な個人的治療スタイルを二〜三紹介してみよう。

私は、どの患者に対しても必ずといっていいほど刺鍼する部位がある。その一つは仰臥

位での腹部、一つは伏臥位での頸部、もう一つは治療の最後に行う坐位での肩部である。

頸部の治療に関しては、以前、「玉枕関を開く」(『続・針師のお守り』に収録)の一文で明らかにしている。また、坐位での肩部の治療については、後回の「近況雑感」(『肩の散鍼(単刺)』の題名で本書に収録)に譲ることにして、ここでは腹部の治療について若干説明しよう。

問診から始まって、仰臥位での舌・脈診などを行った後、そのまま、仰臥位から治療を開始するが、「正気不足」の人ではすべて、仰臥位のとときに腹部四穴に対する治療を手足の経穴に組み合わせる。

場所は中腕・天枢・関元・神闕の四穴で、多くの場合、中腕・天枢にまず刺鍼し、関元にはピロ灸を据え、ピロ灸が熱くなったら、それを神闕に移して、関元に刺鍼するというものである(ピロ灸については「ピロの葉灸」の題名で本書に収録)。あるいは、禁鍼穴である神闕以外の四穴には、灸頭鍼を施す。

この四穴のうち、中腕は胃募穴であり、手の太陽・手の少陽・足の陽明・任脈の会で、八会穴の腑会穴である。天枢は大腸の募穴、関元は小腸の募穴で足の三陰経と任脈の交会穴である。また、神闕は臍中にあり、名称から判断すると、神が舍るとされている場所

ある。

こうしてみると、この四穴に対する各種の刺激には、お腹の調子を整えることによって精神を安定させる作用があることが容易に想像できる。

これまでの長い時間の経過のなかで、お腹について着目させられるさまざまな契機があり、鍼灸師になってから、次第にお腹のツボに治療を施すようになってきた。

五歳の頃、母に連れられて母の実家に行ったとき、とんでもない悪さをして、お灸を据えられたことがあった。母や親戚の人たちが手足を抑えて、臍の横に直接灸を据えたのだ。今でもそのお灸の痕が残っており、それから判断すると、「盲兪」から「天枢」付近である。もちろん、母も親戚も鍼灸の業界とはまったく無関係で、二度とそんな悪さをさせないためのお仕置きのつもりだったのだろうが、なぜか、臍の横なのだ。おそらく母の実家では、子供に対する一番のお仕置きは、臍の横の癍痕灸と決まっていたのではないだろうか。

後から考えると、お仕置きと合わせて、お腹を丈夫にするための先祖伝来のご配慮なのかも知れないが、子供にとっては今でも記憶に残る恐怖以外のなものでもない。

国語辞書には、「お灸を据える」という言葉が出ており、その意味として、「子供に対し

てきつく注意したり罰を加えたりするときに用いる」などの説明が加えられているが、今では、死語に近いものではないだろうか。しかし、ひと昔前には、各家にお灸の道具があり、「足三里」などの「養生灸」は家庭で据えていたのだから、「お灸を据える」ことは文字通りの内容であったはずである。とすると、お仕置きのために子供に「お灸を据える」場所は一体、どこだったのか。各家でバラバラだったのか、それとも「お仕置きの灸点」ともいえる場所があったのか、たいへん興味あることである。

小学生の頃、学校の帰りなどに、JR中央線の四谷駅から市ヶ谷駅の間にある外堀の土手で遊んだりしたとき、線路を跨いだ外堀の向こう側、地名では「新宿区本塩町」のあたりに、木製の黒塀に白色の目立った字で大きく「東京温灸院」と書かれた屋敷が見え、一体、あそこはなんだろうと子供心に思っていた。鍼灸界に籍を置くようになった頃、そこに治療に通っている人から、あそこの温灸院は臍に温灸を据えるのだと聞かされた。臍灸でお腹の調子を整え、自律神経を安定させ、万病に効かせるのだそうである。この文章を書こうと、インターネットで「東京温灸院」を検索してみたら、以前の場所ではないが、やはり四谷の地で、東京温灸院は現在も存続していた。その創業は大正三年と書かれていたから、もう一世紀以上も同じ治療を継続しているのだ。実にたいしたものである。